春季講演会

別府のつげ細工について

安藤康夫

はじめに

別府の特産品としてのつげ細工について別府史談会の皆様にご紹介できますことを大変光栄に存じます。

私は昭和二三年生まれで、つげ細工を始めたのは昭和四六年二二歳の時です。

我が社は大正八年の創業で、昭和五年以来松原町の現在地で営業しています。祖父の代から私で三代目となります。

工場は昭和初期の二階建ての長屋で一階が工場、二階が居家になっています。私はこの長屋で生まれ育ちましたので、遊び場も多くの職人さん達とも過ごし、仕事も私生活も共にしてきました。私にとってつげ細工は私の家そのものですが、別府の市民の皆様はどの様に認識されているのでしょうか。ある時、人から聞かれました。「つげは竹かい？木かい？」さすがに降参しました。しかし、それも仕方のないことです。別府は竹細工の産地として有名ですから勘違いしやすいのでしょう。つげ細工は昭和一〇年前後に繊細な透かし彫りの技術とサンゴ彫刻の技術とが融合してできた細工物で、つげの花櫛やかんざし、帯留めなどが作られていました。他に類のない別府独自の細工物です。しかし、現在は当時のような高度な技術の作品はありません。経営の為、量産可能な商品に終始しています。どのようにすれば再びつげ細工が復活できるのか、生き残るための道を探りたいと思います。

一、つげの木について

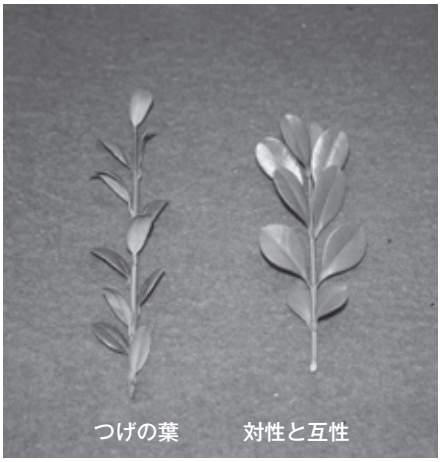
ツゲの木は常緑小高木で、成長がきわめて遅く、直径一〇cm以上のものは少ない。葉は爪ほどの大きさ、楕円形（だえんけい）の対生で生えています。

三月下旬から四月にかけて白い小さな花が咲きます。よく庭や緑地帯に植えられている低木はヒメツゲが多いようです。また庭園や生け垣などはイヌツゲやマメツゲが多く、これらはツゲ科ではなく、モチノキ科です。試しに彫刻してみましたが全く別物でした。ツゲによく似ているので間違えられますが、葉の生え方が互生になっているので見分けがつきます。ツゲの木の自然分布は関東以南の石灰岩、蛇紋岩地帯

つげの木

に群生しています。九州では福岡県嘉穂郡の古処山、鹿児島ではツゲの植林がさかんで、呼称「さつまつげ」として国内の需要の大半を賄っています。他に伊豆七島の御蔵島のツゲが有名で「島ツゲ」と呼ばれ、関東方面に出荷されています。

ツゲは漢字で、黄楊・柘・柘植が使われています。材質は固く石のようで「一度切ったら次になかなか大きく育たないから、ちゃんと植えないと枯渇しますよ」と漢字がうまく表現しています。万葉集では大伴家持（やかもち）の歌が「をとめらが後のしるしと黄楊小櫛生ひ更（かは）り生いてなびきけらしも」が有り、当時は黄楊という漢字が使われていたようです。ツゲの木は固くて粘り強く折れにくく木肌は緻密で均質です。それゆえ



つげの葉　　対性と互性

使えば使うほど艶が出てくる高貴木として古（いにしえ）より愛用されてきました。用途としては第一につげの櫛・印鑑・将棋の駒などがあります。その他、ヘアーブラシの歯部・そろばん玉、絹織物用のシャットル（糸まき棒）、楽器用材・琵琶の撥（ばち）・彫刻工芸品の材として使われています。

二、つげ細工の誕生とその後

別府つげ細工の歴史について書物になっている資料は一冊しか確認できていません。昭和五七年当時別府市役所商工課課長の日名子洋一さんが編集された「別府つげ細工沿革史」です。丹念に取材、調査され、まとめ上げて後世に残していただいたこと真に感謝する次第です。この本を参照・要約し、つげ細工誕生の背景を探ってみます。

一　原木環境

つげの木の自生地は豊前地方の香春岳、英彦山・古処山、豊後地方では速見郡、大分郡、玖珠郡の各地方に群生していたようで、湯の平や玖珠の恵良からも櫛板が別府に運ばれていました。木櫛の材料はつげ以外にも茬・椿・山梨・桜・梅・モヨミ等、多くの材料で作られていましたが、その中でも最高級の素材はつげの木でした。

二　明治時代

明治初期の頃、まだ未開発であった別府も明治六年、北浜海岸に関西からの定期便も就航するようになり、急速に発展し多くの人たちで賑わい商業も盛んになりました。竹瓦と浜脇を結ぶ中浜筋には商店街が形成されていきました。明治一八年、小県商店が開店しました。後の通称「アカカベ」です。大分県下一の「おしゃれの店」として小間物商を営み、たいそう繁盛していたそうです。その取り扱い商品の中に木櫛がありました。当時は日本髪でしたからいろんな種類の櫛が使われました。解し櫛、ビン櫛、筋立、深歯間、梳き櫛等、種類も豊富でした。そこで多くの櫛工が育てられました。私の祖父もその中の一人でした。

三　大正・昭和初期

木櫛を作る技術も進歩し、歯挽機械も導入され、品質の安定化と量産化されるようになりました。この頃、櫛に家紋の透し彫りしたものが開発され花櫛（前指櫛）や平打かんざしの家紋入りなど付加価値の高い商品が考案され始めました。他方、セルロイド櫛の登場で木櫛の需要は落ちてきたようです。しかし、ドイツ製の糸鋸の導入で透かし彫りの技術により製品も進歩してきました。

これまでに無かった帯留めなどが作られるようになり、多くの展覧会や博覧会などに

つげ透かし彫り　花櫛

つげ透かし彫り　花櫛

出品され評価を得ていたようです。

昭和七年以降は高知県や長崎県のサンゴ職人が別府に集まるようになり、サンゴ彫刻の新たな図案と技術と繊細な透かし彫りの技術が融合し、他に類を見ない新たな工芸品としてツゲ細工が完成されました。

四、終戦から昭和四〇年代

昭和一〇年前後から花開いたつげ細工も昭和一六年からの戦争の影響で生産は中断されてしまいます。そして戦後は昭和二四年につげ細工製作所二社の共同経営で黄楊工芸有限会社が設立され、また、戦前からのつげ細工製造各社も活動を始め、有能な職人さんが独立起業して産業は拡大していきました。しかし、大きな転換期を迎えます。昭和三五年、その頃台頭してきた唐木家具に多くの熟練彫刻工が引き抜かれ、つげの産業は頭打ち、経営は活気を失ってゆきました。またそれに追い打ちをかけるようにつげの木が入手困難になってきました。国内での需要が増し、鹿児島からの原木が枯渇し始めたのです。そして昭和四二年にかけ徐々につげの材料はタイ国から輸入されてきた呼称「シャムつげ」が本つげとして販売されるようになりました。高度経済成長の時代で、より早くより多く、より安くのかけ声で生産されるようになり、市場競争は激化して品質は落ちてしまいました。そして昭和四八年秋のオイルショック以降消費動向は大きく変化し本物指向の時代を迎えます。当時、つげ細工は卸売り業者を通じ、全国各地で売られていました。花柄のブローチやペンダントはこの時期を境に全く売れなくなり、徐々に姿を消してしまいました。

五、昭和五〇年～平成二六年、現在

つげ細工の業界全体が苦境に立つなか昭和四六年、メーカー八社が任意の組合を作り、親交を図っていました。そして昭和五四年には正式な別府つげ加工業協同組合が設立されました。一致団結、相互扶助の精神に基づき、つげ原木やその他資材の協同購入が大きな活動でした。当時の組合員の数は一三社、年間出荷額は二億二千六百万円となっています。しかし、その後は倒産や高齢化、死亡などによる廃業で徐々に衰退してゆきました。

平成一七年、別府つげ加工業協同組合は解散し新たな任意組合としてメーカー四社が親交を深めています。

主な販売商品は神社仏閣への干支の木彫、縁起物の置物、

ストラップ、さつまつげの櫛やヘアーブラシが作られています。

おわりに

つげ細工の誕生とその後の変遷を要約してみました。

個人名や企業名はできるだけ避けて大筋の流れを摘みやすくしました。「つげ細工沿革史」では特定の個人名を掲げ、別府で最初の地櫛工だとか、また、つげ細工の始祖だとか書かれていますが、著者が調べた範囲内で決め付けられるほど歴史は浅くないと思います。今度の機会に再度つげ細工の歴史を認識し今後を模索することができましたことに深く感謝申しあげます。

つげ細工は別府が観光地として大きく飛躍する時代に生まれ育ちました。別府発展の魅力無くして、つげ細工はなかったでしょう。そこに多くの工人や技術を呼び込み集積し融合され新しい工芸品が生み出されました。

別府らしい、別府にしかない、別府独自の文化として形成され、伝統となり、守り継がれ、市民の誇りとなることを期待します。それが又別府の魅力となる好循環が生まれる様な、そんな工芸品を目指したいものです。

参考文献

『別府黄楊細工沿革史』昭和五七年
「昭和五十六年度　活路開拓調査指導事業実績報告書」
『木の事典』かなえ書房